Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　ＥXTRA　転生者と不可思議な従者達の夜

隻原　伽藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　ＥＸＴＲＡ　転生者と不可思議な従者達の夜

【Ｎコード】

Ｎ１５３６Ｚ

【作者名】

隻原　伽藍

【あらすじ】

ある日、私は死んだ。

でも、神様（？？）みたいな人に転生させられて、ｆａｔｅの世界に来ちゃった・・・・・・これから・・・どうしようかな・・・・・・

サーヴァント・ガーディアンの　設定（前書き）

これは最新まで読んでからの方がいいかも。

サーヴァント・ガーディアンの　設定

クラス：　ガーディアン（守護者）

マスター：　悠薙　紅

真名：　？？？

性別：　少女

身長：　１５２ｃｍ

体重：　３０ｋｇ

好きなモノ：　悠薙　紅、

嫌いなモノ：　敗北、守りきれなかった者、遠坂　凛

特技・趣味：　料理

属性：　守護・中立

能力

筋力：　Ａ

耐久：　ＥＸ

敏捷：　Ａ＋

魔力：　Ａ＋

幸運：　Ｅ

宝具：　？？

クラス能力

守護者の資格　【Ａ】

誰かがピンチの時、駆けつけ守り切ることができる能力。Ａだと数百人規模を確実に守り切れる。

保有能力

適性強化・霊　【　】

他の英霊に能力、クラス、外見、宝具等をあわせる。このスキルに他の例がないことからこのスキルは計測不能。

？？？？

？？？？

詳細

？？？？

宝具

?????

?????

?????

?????

サーヴァント・ガーディアンの　設定（後書き）

新年早々の投稿ｗｗ

まぁ…予約だけど。

この節は何回も書き換えていくので現在のガーディアンの状況といってもいいでしょう

マスターの設定

マスターの設定

名前：
悠薙　紅

身長：
１８２ｃｍ

体重：
６７ｋｇ

性格：
穏やかで優しい（甘いとも言う）。だか所々棘があり、冷徹で機械的な二面性を持つ。

特技・趣味：
特技…射撃・剣術
趣味…礼装作り（何故かたまに宝具と同クラスのモノを作る。）、料理

好きなモノ：
平和、戦争、努力、ただの何でもない人々

嫌いなモノ：
正義、悪、正義の味方、聖杯、英雄

魔術回路：４６本

魔術特性：　全ての複製、行使、使役

武器：

？？？？？

？？？？？

？？？？？

？？？？？

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　開幕の鐘は鳴る（前書き）

タイトルの語呂が悪い……
（，・ω・、）
仕方ないか。無理矢理入れたんだし。

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　開幕の鐘は鳴る

ある日、事故にあった。
その世界から、私『悠薙　紅』の存在が消えた。

目をあける。不思議な世界だ。
「Ｈｅｌｌｏｒ　Ｈｅｌｌｏｒ＜ハロハロ＞？聞こえてますか～？」
ふざけた声が聞こえる。

「オホンっ。貴方！別世界に転生してみたくないですか？」

・・・・・・ふざけているのか？

「いえいえ、マジですよマジ！貴方の趣向からいくと・・・・・・・
ふむ、Ｆａｔｅの世界なんてどうでしょう？」
・・・・・・お願いします！！
「能力とかはどうします？」
知っているモノをコピーするの魔術回路かなー。身体能力は普通より少し上で、多重契約権も。

「ＯＫ～。ではでは、さようなら～」
という声と共に俺の意識は薄れていった。

空は焼けている
家が溶けている
人は潰れている
路は途絶えている

これが戦いの源泉
これが再起の原風景

ここで私はただ一人生き延びた

思い出すな／忘れるな

忘却は至高の救いであり、最悪の罪である

忘れるな
地獄から私は生まれた

これは忌まわしい夢
何処かであった
何処にでもあった
そして此処に起きた、幼年期の記憶である

多くの血が流れ、響き渡る怨嗟の声を聞いた

命は消える。思いのほかあっさりと
肉親も友人も、名前も知らない隣人も他愛なく
銃を持った兵士も、生き延びようとする家族も、
最後まで醜くも逞しくあがき、臨終の間際、穏やかな面持ちで呼吸を止めた

――――それがどうしても承伏できなかった。
何故、という疑問が消えなかった。

紛争と天災の違いはあれ、なぜこのような悲劇が起きるのか
なぜ誰をも救う事が出来ないのか

いや、そもそも――
なぜ世界はこの地獄を許すのか

カタチあるもの、生あるものは、一人を残して消え去った。

無力感と絶望の中、意識は薄れていく
胸にあるのは疑問と怒りと――

多くの人間の、人生の、時間の痕跡が、跡形もなく消え去った。

その犠牲を見て、死の淵でなお頭をあげた
認めない、と

もしもう一度まだ命を与えられるのなら今度は、今度こそは、決して――

忘れるな

地獄から私は生まれた

その意味を――

どうか忘れないでくれ

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・・

どうやら、欠けた夢を見ていたようだ。ソコはいつもの風景。いつもの行事。

・・・・・・・・・・のはずだが、この世界は何かおかしい。

校門にたつ黒い学生服・・・・・・確か生徒会長だ。が誰もいない虚空に向かって高らかに独り言を言っている。明らかな異常に気付かない他の生徒。

そして、最近起こっている生徒の消失。

ノイズにまみれた視界。

ココは決して自分の知る学校ではない！

バチッという音と共に風景が変わる。

「な、なんだ！？」

あまりの唐突な出来事に驚く。

「む、リストにない者か・・・・・・試すか」

と、声が聞こえた。

振り向くと、黒い格好をした（新任のクズキ先生だと記憶している。）人が立っていた。

だが、回りに漂う雰囲気は教師のそれでなく暗殺者のモノだと・・・・・・

ここで思考が遮断された。
なぜなら、正体不明の衝撃が走ったからだ。

バタリ、と倒れ混む。
「カカッ　他愛のないものだ・・・」
と、聞こえたが何がしゃべったかすらわからない。

横を見ると霞んだ視界に土色の塊がいくつも浮かび上がった。
いや、今になって見えただけで元からそこにあったのかもしれない。
それは、幾重にも重なり果てた月海原学園の生徒達だった
そして自分もその仲間入りするだろう・・・・・・

いや。このまま終わりにするのは許されない！

（いずれ膝を屈する時が来るとしても、今ここで諦めるのは間違っている・・・・・・・・・気がするのだ。）

立たないと・・・・・・

（からだの感覚が、薄れている。全身を駆け巡る痛みはとうに許容外の蓄積。死後の拷問、地獄の責め苦をイメージさせる。）

怖いままでいい

（・・・・・・それでも、私『自分／貴方』は、立ち上がらないと。
それは自分でも理解できない衝動だった死ぬのが怖いのではないむ

しろ、楽になりたがっている。）

痛いままでいい

（・・・・・そうか。理由はきっとそれだけだ。
多くの死体と問いかけがあった）

その上でもう一度考えないと

（なら・・・・・・分からない、で済ませてはいけない。）

・・・・・だってこの手はまだ一度も自分の意思で戦ってすらいないんだから！！

（自分は心を持って目覚めたなら。
分からないまま終わるのだけは命あるかぎり許されない！）

『・・・・・ほう。その強い疑問、聖杯の代行者として聞き逃せないな。
君は死に瀕しながら己が生に疑問を抱き、死に飲まれながら自らの不明を恥じた。
宜しい。その心の在り方に期待しよう。』

ガラスの割れる音が響き、共に部屋の明かりがともった。

そして、自分の目の前に白い服を着た少女が立っていた。

外見はほとんど普通の人間と変わらない。だが、違う。明らかに。

「・・・・・・貴方が私を呼んだの？」

と、キョロキョロしながら聞かれた。
「え・・・君は・・・？」
と、思わず聞き返した。

「ううん、大丈夫。とまどうのも無理はないわ。それでも、私のマスターってことにはかわりないもの。」
と、少女は言った。

「・・・何故呼び出せた？」
そう、問うのは先程なすすべもなく・・・・・・いや、何をされたかも分からず倒された、クズキだった。

「アサシン、排除しろ。」
冷淡にいい放つ。

「カカッ　どこを壊せばよいのやら・・・・・・」

そう言って現れたのは、目の前の少女と同じような存在だった。

そして、アサシンと呼ばれた者が前に出ようと力を溜める。・・・・・・が

『予選終了です。突破できなかった者は削除します。』

と、いうアナウンスと壁により阻まれた。

「マスター、これから聖杯戦争のはじまりよ。私には・・・って聞いてる？」
と、少女が心配そうに声をかけている。だが、俺の意識は次第に遠くなっていった。

999人→128人

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　開幕の鐘は鳴る（後書き）

紅

「主人公の性別が一番迷ったかもしれないって作者がいってたぞ。何でだろうな……？」

サーヴァント

「さぁ？私にも理解できないよ。在るとすればなぜ私達がこの『後書き』に出ているかだけだと思うよ……」

紅

「じゃあ、何でこの『後書き』に出ているんだ？」

サーヴァント

「決まってるでしょ？作者の気まぐれよ……まぁ無事に切り抜けられましたけどマスターは本当に災難な人生ですねぇ……」

紅

「うるせ。まぁ、無事に終われてよかったよ。え～っと…読者さんこんな馬鹿な作者ですが、どうぞよろしく！」

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　開戦１日目朝　屋上へ

起きるとそこは学校の保健室だった。

「はぁーあ。ようやくお目覚めですかー。相当とのんびりしたものですねー。私も隣で寝ていい？」

ベッドの横に、人影が現れる。白い外套と白い服・・・といういでだちのサーヴァントがたっていた。

「体の調子はどうですー？」

ズキリ、と頭が痛む。何かが頭の隅に引っ掛かっているようだ。

転生前の記憶が・・・戻っている・・・？

「・・・マスター、私は特例のサーヴァント、クラスは守護者（ガーディアン）みたいです。聖杯戦争についてしっていますか～？」

聖杯戦争・・・この場所は月にある、ムーンセルオートマンと呼ばれるモノのなか、霊子虚構世界・・・通称『ＳＥ．ＲＡ．ＰＨ（セラフ）』の中で行われる。過去では７人のサーヴァントと７人の魔術師達によるバトルロイヤルであったが、この聖杯戦争はバトルロイヤルの所しか引き継いでいない。

マスターには、それぞれサーヴァントが与えられ殺し合う。

「ああ。」

と俺は答える。

「じゃあ、サーヴァントについては？」

とガーディアンが聞いてくる。

サーヴァントはムーンセルに記録された人類の内、過去の『英雄・偉人』の魂、すなわち英霊のデータをこの世界に再現したモノだ。

サーヴァントには役割として自分に該当する「クラス」が存在し、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、キャスター、バーサーカー、等が基本だが、場合によりイレギュラーが現れることがある（ｅｘ、アヴェンジャー）。自分のサーヴァントはイレギュラーのクラスであるようだ。

この聖杯戦争では、令呪が参加条件なので、無くなると強制敗北となる。

令呪は、自分のサーヴァントに対する3回限りの『絶対命令権』で『「不可能」を「可能」にする使い捨ての強化装置』である。

・・・もっともこれを使うとしても二度までだ。三度目を使って死ぬのは御免被る。

「では、私は『適性強化・霊』のスキルを使い、他のサーヴァントの能力とスキル、外見をコピーするね。指示はある？」

え…？マジ？そんなことできるの？

「うん。私の能力は限定的であまり長続きしないけどね。マスターやこの聖杯（ムーンセル）に記録されていれば大丈夫だよ。」

「ちょ、お前な、心をよむな！」
少々驚く。……というかここまでくると何がなんだか……
とにかく、ここからの目標は提示された。とりあえず、従っていくとしようか。

「まぁ……よろしくな。えぇっと……」
俺がどうよぼうかいいよどむ。
すると、彼女が
「…私のことはリズ、とでもよんで？」
オォゥ、そんな真名に繋がりそうなモノを…

……まぁ、いいか。
「よろしくな！リズ！」

「うん、よろしくね！悠薙！」

いきなり呼び捨てか。別にいいけど。
保健室のベットから這い出る。

リズは姿を消して後に続いているらしい。姿を見られて正体がわれるのをふせぐためだろう。

保健室をでて、そのまま屋上に向かってみる。

その途中、いろんな話を聞いた。

「俺は、地方では有名な霊子ハッカーだったんだ。」
とか、
「私はこの聖杯で幻想(ユメ)を叶えるんだ…」
とか、
「…あの学園生活が予選だったとはね…」
とか。

みんな、それなりの覚悟……いや、覚悟というより、目的を持っているように見えた。

そう。俺みたいに借り物(にせもの)の幻想(ユメ)ではなく、自身(ほんもの)の理想(ユメ)を。

「はぁ……勝てる自身がないな〜……」
屋上につき、独り言をもらす。
『何いってるの…私が不満?』
と、リズが不平を漏らす。
「いや、サーヴァントには、負けない自信はある。でもな…」
俺は遠い目をしてしまう。
そう。サーヴァント云々でなく、内面。俺の内面はただの借り物だ。

そこが大きい。

借り物とわかっているモノと、真剣に追いかけるモノ。
確実に執着がないのは前者だ。

そこが決定的に差になる。

そこをどう覆すか。おれが考えるのはそこだ。

『なに、きにするでない。我が奏者(マスター)なら、そのうち見つかるであろ

う。』
リズの口調と態度が変わった。
と、言うことは……
「…セイバー？」
『うむ。こたびの戦いは私が引き受ける。よろしく頼むぞ、奏者よ。』
と、セイバーが言った。
確かにこれなら相手に作戦や対抗策をねられてもクラス、サーヴァントチェンジでどうとでもなる。
いい案だ。そう思っていると、
「そこの貴方、ちょっといい？」
と、突然声をかけられた。

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　開戦１日目朝　屋上へ（後書き）

セイバー
「な、何故最初に余にしたのだ…作者は余が嫌いなのか？いや、それとも……（ギロッ）」

ガーディアン
「あ、出ない方がよかった？じゃあ今すぐアーチャーとかに……」

紅
「な、何かな？セイバー？」

セイバー
「ぬぅぅぅ…ガーディアンめ……」

女の声
「あまり気を落とさないでくださいな♪私は出られるみたいですけど、出れない方々もいらっしゃるみたいですし…まぁ、私はご主人様といっしょにいられれば……」

男の声
「まったく、人騒がせなやつらだ。最後位は締め切ってやろう。またな、君たちにまた会える事を願っている。」

セイバー
「貴様らは誰だ！！というか余の話が終わってなぁぁい！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1536z/

Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　ＥＸＴＲＡ　転生者と不可思議な従者達の夜

2012年1月10日12時47分発行